

『動物考古学の原点』

国立歴史民俗博物館 西本 豊弘 氏

第7回目の「*Fieldworker*」は、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生です。西本先生は、動物考古学を専門にされており、伊達市北黄金貝塚で出土した動物骨の同定作業をされています。動物考古学に出会ったきっかけや北海道の貝塚の魅力を伺いました。

— 先生が動物考古学と出会ったきっかけは？

早稲田大学に入った頃、僕は考古学ではなくて東洋史学を専攻していたんですが、当時は学園紛争だったので授業が少なかったのです。それで、発掘によく行くようになりました。最初は、古代の寺院や集落を掘っていたのですが、貝塚に連れて行ってもらったら骨が沢山出てきて面白かったんです。それで3年生になる頃には、東洋史から考古学に転向してしまいました。当時、僕の先生は西村先生といって、5月と11月の連休には必ず貝塚を発掘されていました。最初は気楽に行っていたのが、毎年の発掘に参加するようになりました。

貝塚を発掘すると土器や骨が出てきます。動物骨を専門とされていた金子浩昌先生（早稲田大学）に「これは何ですか？」と尋ねると、「シカの上腕骨だよ」と答えてくれる。で、10分くらいしたら、また骨が出てきて、「これは何ですか？」と金子先生に訊くと、先生はまた「シカの上腕骨だよ」と言うんです。自分では全く別の骨を尋ねているつもりだけど、先生は同じ骨だと言う。それが何回も続いて、終いには怒られる。これではダメだと思って、2年生から3年生になる春休みに金子先生の研究室に行



西本豊弘（にしもと とよひろ）
国立歴史民俗博物館教授。
1947年生まれ。大阪府大阪市出身。
著書：「人と動物の考古学」、
「衣食住の歴史」他。

き、骨を教えてくださいとお願いしたのが動物考古学を始めるきっかけだったんです。金子先生に骨を尋ねると、小さな骨でも「スズキだよ」と言われるわけですよ。これが不思議だった。単純ですけど。

縄文時代の遺跡を発掘すると土器が沢山出てきます。しかし僕はどうしても土器は好きになれなかったんです。土器の専門家は今でも沢山いるけど、動物の方に興味を持ったのは、もともと動物が好きだったからかもしれません。



遺跡から出土した動物骨を同定している

—動物考古学となると、標本作りなど発掘以外の仕事もありますよね？

僕は自宅が大阪市で旧淀川が近くを流れており、その近くにイノシシの肉屋さんがありました。店の近くを歩いていると今では考えられないのですが、イノシシが転がってるんですよ、大阪の真ん中で(笑)。それで、イノシシの頭を最初買って、自分でドラム缶でゆでて標本にしたんです。家の庭で煮たから、獣の臭いがすごくてえらく怒られましたけど(笑)。それから、店の人と何度も話しをして、標本にするからと説明して、頭の骨や1体分の骨をもらえるようになりました。イノシシ以外でもずいぶん標本を作りました。遺跡から出るありとあらゆる骨を同定するには標本が必要だったから、全て自分で作ったんです。それは基本ですね。



—北海道にいらしたきっかけは？

大学の4年が終わった時に、金子先生にあちこち連れて行ってもらって骨を分類しました。その時に骨が沢山あるよと言われて北大に連れて行ってもらったのが最初です。北大の北方文化研究施設には海棲哺乳類の骨が山のようにあったんです！オットセイとか。それで感激しちゃった。翌年には北大に研究生で入って、礼文島の香深井A遺跡の発掘にも行きました。北方文化研究施設では遺跡から出土した海獣骨や魚骨を毎日分類していました。その頃、北大の歯学部で大泰司紀之先生がおられて、その先生の研究室で色々な動物の標本作りをしていました。僕もそこで標本作りを教えてもらいました。僕は北大の文学部に籍がありながら、半分以上は歯学部でした。北大の大学院に入るまで、4年かかりましたが、その間は発掘と遺物整理と標本作りばかりやっていました。北大のヒグマ研究会の学生とも知り合いになり、動物生態を教えてもらいました。今から考えたら、一番勉強した時期です。

—オットセイは捕獲が禁止されていますが、どのように入手したのですか？

オットセイは特別天然記念物だから捕獲できなかったんです。それで、太泰司先生に紹介してもらっ

て静岡県清水市の遠洋水産研究所を訪ねていったんです。そこにはオットセイ研究室があり、和田一雄さんという研究者がおられたのです。和田さんは、当時、海棲哺乳類の研究者の中心の一人で、オットセイの生態について親切に教えてくださいました。また、海獣談話会という研究会を紹介していただき、そのおかげでトドやアシカ、アザラシの研究者と知り合いになりました。北大水産学部の先生からはホッケやニシンやマダラなどの生態を教えてくださいました。実際にフィールドで動物を観察している研究者は実にフランクで、門外漢の私に親切に動物の情報を教えてくださいましたので、このような研究者もおられるのかと感激しました。そして、魚類や鳥類やクジラなどいろいろな専門の研究者が海獣談話会で議論をしているのを見て、広い視野が必要とつくづく感じました。この経験が私の研究姿勢の基礎になったと思っています。

—札幌医科大学に行かれた経緯は？

それは簡単で、職が無かったからです。大学院の博士課程になって、30歳前後の頃に、職を探していましたが、その頃におられた札幌医科大学の百々幸雄さん(現・東北大学大学院名誉教授)と知り合いになって、助手に受け入れていただいたのです。札幌医大での2年間も大変勉強になりました。それまで、北大の歯学部の太泰司先生のところで歯の成長や摩耗のことを学んでいたのですが、人骨の成長プロセスや成育異常などの変異を解剖学の先生たちから学びました。この二つの研究室の経験がなかったら、弥生時代のブタを認定することはできなかったでしょう。

—色々な貝塚を発掘されていますが、北黄金貝塚を発掘した印象は？

関東の貝塚は、貝殻ばかり出てきて骨がほとんど出ない貝塚が多いのです。それに比べて、北黄金貝塚は骨の宝庫だった。ウバガイ・ハマグリなどの貝殻だけではなく、シカやオットセイ、ソイやヒラメ・カレイなどの魚骨も出てくるから非常に面白いです。出てくるものが、非常にバラエティがある。お世辞じゃないけど、関東から北海道までの貝塚を掘っていて、噴火湾は寒流と暖流のぶつかり合う場所ということもあって、北黄金貝塚は一番面白い貝塚です。寒流や暖流の魚類と海獣骨が沢山出てくるということは、それだけデータが豊富であり、いろいろなことが分かるのです。

—年代測定など色々なことをされていますが、その中で専門の動物考古学があるのですね。

僕の専門は動物考古学だから、骨が出ると言われ

たらアラスカでもどこでも行きました。だけど、基本的には、縄文文化が自分の専門分野だと思っています。それと人間のことを中心において研究しているということです。僕は自分の専門分野を「動物考古学」と名付けたけれど、「考古動物学」とは絶対にしなかったんです。あくまでこの分野は人間の歴史を考える考古学だという考えだからです。ヨーロッパでは、ズーアーキオロジーとアーキオズーロロジーの二つの流れがあるんですけど、僕は前者をとった。ズーロロジーとすると動物学になってしまうから。僕は考古学の間人であって動物学の研究者ではないという意識がずっとあるんです。だから、僕は年代測定にも興味があるし、植物にも手を出します。最近、「人と動物の考古学」という本を出しましたが、どうしても「人」を入れるのが僕の主義なんです。

—フィールドとしての北海道の魅力は？

礼文島の香深井A遺跡というオホーツク文化の遺跡で、魚骨層というのは初めて見て驚きました。掘っていると魚の椎骨がずらっと繋がって1匹分出てくる。断面を見ると頭から尻尾まできれいに繋がっているんです。北海道のフィールドの魅力は骨の保存性が良いところだと思っています。

—発掘の仕方は昔と変わりましたか？

昭和46年に僕が北大に来たときに、大井晴男先生にオホーツク文化の香深井A遺跡の発掘に参加させていただきました。その頃、こういう方法で発掘したら面白いとか、こうやったらカロリー計算ができるという風に考えていました。その当時、大阪でオホーツク文化の展示があって、その展示ではオホーツク文化は海獣狩猟で主な食料を得ていると解説されていました。僕はそのことに疑問を持っていたんです。海獣に依存するなんて、あんな不安定な資源ばかり食ってたわけじゃないと思っていました。動物遺体からカロリーを計算したりして、客観的なデータからオホーツク文化の解釈を覆したかったのです。

—科学的な手法を発掘調査に取り入れたのですか？

そうです。魚類、哺乳類、海獣類と、それぞれを食料とした場合に得られるカロリーをきちんと評価して、それをもとに文化を明らかにするというのが僕の発想なんです。それで、香深井A遺跡の発掘で、このような計算ができるように魚骨層の柱状サンプルを取りたいと大井先生に頼んだのです。それを許可していただいたことは大変驚きました。私は北海道に来たばかりの単なる1学生でしたから。その頃は、私だけじゃなくってみんな新しい発掘方法を学ぼうとしていました。アメリカとかヨーロッパの方法

論が注目されていまして。まあ、大学院に入る前から自由に研究させてくれたのです。現在の研究のほとんどは、当時の経験が基礎になっています。



—先生は今年3月に国立歴史民俗博物館を退職されますが、今後は？

退職したら、考古学は全部やめようと思っていましたが、辞められなくなりました。次から次へと仕事が入ってきて、断りきれなかったのです。それと、まだ分類していない資料があり、仕事をすべてやるわけにはいかないことが分かったのです。もう2、3年はやろうかなと思っています。一つは、中国の仕事で自分がやり残したことがあります。弥生時代のブタの問題です。僕は弥生時代のブタを研究してたんですが、最近、僕の研究結果を否定する意見も出てきて、こりゃいかんということになって、もう一回、ブタを研究しようと思っています。家畜化現象をもう少し皆さんに知っていただきたいと思っています。

それと、貝塚研究を新たに行う必要性を感じています。その研究の一つとして北黄金貝塚を中心とした研究をやりたいと思っているのです。

—今の若い研究者に一言

僕は魚も哺乳類も全ての骨を扱ってきて、無駄なことをいっぱいしてきました。でも、最近の若い研究者はそれをやらない。今は、専門が細分化しているから、動物の中でも海獣しかやらないとか魚しかやらないという人が多い。また、確立された学問の枠の中で小さいテーマしかやらない人が多くなっています。これはすぐに成果を求める時代だから仕方がないけれど、全ての動物にも目を配る必要があります。魚類だけや鳥類だけ分類しても、それを利用した人間になかなか接近できないのです。様々な動物群をある程度分類できなければ、考古学での人間と動物との関係は分からないのではと思っています。

そして、最後に言いたいことは、動物考古学は、それだけでは時期も決められません。だから、発掘を行う考古学研究者との共同研究は不可欠です。また、人や動物は植物を食べているわけですから、植物考古学者との共同研究も必要です。動物考古学は単独では成り立たない研究分野です。このような視点も忘れないでほしいものです。

インタビューアー：青野友哉